■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

6　永井均「マンガの哲学」

●出典　永井均『マンガは哲学する』【726/N5/1】（北野高校図書館）

■目標

●書かれていることを具体例と結びつけて捉えなおす。

■追跡

①　まず、不朽の名作から。（本文のマンガ参照）

②　最初、この作品のおもしろさは新しい字を発明するということにあるように見える。たしかに、新しい字を発明したところで、どうなるというのだろう。だが次に、このマンガのほんとうのおもしろさは、新しい字の発音をその字を使ってあらわすことができない、という点にあるように思えてくる。まだその字の読み方を知らないのだから、その字を使ってその読み方を言われても役に立たない。しかし、それだけのことなら、『『こじむい』という新しい形容詞を発明しました。――どういうときに使うのかね？――こじむいときです」でも、じゅうぶんおもしろいはずである。

この「み」たいな「ゐ」みたいな「お」みたいなやつ、なんてよむんやろね。瞬間的にどんな音が浮かんだかな？　なんか、ありえないんやけど、ありそうな音が浮かぶ気もする。

さて、筆者はこのマンガのおもしろさを二つ示している。

1「新しい字を発明したところで、どうなんねん！」（ぼくらは今ある字でなんでもできるとなんとなく思い込んでる）

2「新しい字の発音をその字を使ってあらわすことができない」（そやな。知らない国の文字の発音を、発音を知ってる文字で示すことはできるけどな。「新しい字の発音」は、音がないとむりやなって気づく）

『こじむい』とはこむじいときにつかうことば、というのもおもしろい。たとえば、微妙な方言のニュアンスなんて、結局、そういうしかないような……。「いちびりってどんな意味？」「まあ、いちびりはいちびりやな」とか。辞書などの語義というのは、他の語による言い換えだが、語義を暗記しても実際には使えない。結局、いちびりはいちびってみなければ、わからない。

――でもそれだけではない――と③へ続く。

③　たしかにそういうおもしろさの要素もある。だが、もうひとつ加わるおもしろさは、マンガという表現形式にともなう約束事が、ここにおのずと示されている、という点であろう。マンガは（実際には発音されているのでなければならない）せりふも字で書かれるという約束事のうえに成り立っている。マンガを自然に読んでいる者は、その約束事をもう意識していない。意識していないからこそ、マンガを自然に読むことができるのである。

3「マンガという表現形式にともなう約束事が、ここにおのずと示されている」

この「約束事」とは、「マンガは、実際には発音されているせりふを字で書く」という約束。「おのずと示されている」というのは、せりふを無意識に音として読んでいる私たちは、このマンガを見て、「あ、読めない」って思い、そこから、「あ、ふつうは音として読んでるのね」と気づくということだ。

④　われわれは「こじむい」という言葉の意味を知らないから、『『こじむい』は、こじむいことを意味する」などと言われても、何もわからない。しかし、われわれはみな「すっぱい」という言葉の意味を知っているから、『『すっぱい』はすっぱいことを意味する」という言い方ができるような気がする。もちろん、この場合、最初の「すっぱい」は言葉そのものを指しており、次に出てくる「すっぱいこと」は実際のすっぱさそのものを指しているわけである。

「すっぱい1」は、ことば。「すっぱい2」は、あの、口の中の唾が出る味。＝実際のすっぱさそのもの。

⑤　実際のすっぱさそのもの？　でも、その「実際のすっぱさそのもの」が、ここではもうすでに「実際のすっぱさそのもの」という言葉を使って表現されてしまっているではないか。さてでは、その言葉と実際のすっぱさそのものとの関係を、われわれはいかにして語りうるのであろうか？　それは語りえないのだ。ウィトゲンシュタインという哲学者は「語りえぬものについては沈黙しなければならない」という名言を残したが、それは1このような構造を指しているのである。

「『すっぱい2」は、あの、口の中の唾が出る味」とさっき書いたが、たしかに書きながら、それはことばに過ぎないなあ、と感じていた。

問いは、「その言葉と実際のすっぱさそのものとの関係を、われわれはいかにして語りうるのであろうか？」。答えは、「むり」。読解問題1は、それをさらに問いにしている。

**読解問題1**「このような構造」とはどのような「構造」なのか。具体例を挙げつつわかりやすく説明しなさい。

指している内容自体は、先の問いと答えをひとまとめにして

**解答例1「すっぱいという言葉と実際のすっぱさそのものとの関係を、語ろうとしてもできないという構造。」**

となる。

なぜできないのか。ここからは本文に書いてあることを超えて、自分で考えなければならない。

私たちは、すっぱいという言葉から実際のすっぱさを想像したり、この言葉が使われている文を理解したりできる。（自分の）実際のすっぱい体験と「すっぱい」という語を直接接続して理解している。そこでとどまれば、言葉としては機能する。

しかし、体験を離れて、すっぱいという言葉と実際のすっぱさそのものとの関係を語ろうとすると、その説明には当然言葉を使うしかない。たとえば、私たちと異なる感覚器官をもつ宇宙人に説明すると考えてみよう。「実際のすっぱさそのもの」といおうが、「あの、梅干を口に入れたときの唾が出る味」といおうが、じゃあ、梅干って何、唾って何、ということになり、それもまた、言葉で説明するしかない。言葉の外に出ることはできない。それ以上はどうにも「語れない」ラインがあるのだ。

**解答例2「すっぱいという言葉は、実際のすっぱさそのものと直接結びついて理解され、言葉として機能している。しかし、その言葉と体験の関係を説明しようとすると、「実際のすっぱさそのもの」といった言葉を使うしかなく、それ以上の場所から説明することはできないという構造。」（一二五字）**

⑥　読み方についても同じことが言える。この少年が発明したような新しい文字ではなく、われわれがすでによく知っている文字、たとえば「あ」なら、『あ』は〔あ〕と発音する」と書いてよいような気がする。たしかに、「あ」という文字を黒板に書きながら〔あ〕と発音して聞かせるといった場面なら考えられるだろう。つまり、最初の「あ」は文字を指しており、次の〔あ〕は音を指しているわけである。

「すっぱい1」＝ことば／「すっぱい2」＝あの、口の中の唾が出る味＝実際のすっぱさそのもの、という構図を読み方に適用したら、「最初の「あ」は文字／次の〔あ〕は実際の音」という構図になるいうわけだ。

⑦　音を指している？　でも、その音が、ここではもうすでに「あ」という文字を使ってあらわされてしまっているではないか。とすれば、その文字とそれがあらわす音との関係を、われわれはいかにして書きうるのであろうか？　2それは書きえないのである。

ここにも、読解問題1と同じ問題が表れている。それは、言葉ではいえない。

**読解問題2**「それは書きえないのである」とあるが、なぜか。具体例を挙げつつわかりやすく説明しなさい。

本質的に読解問題1と同じ。解答も同形になるべき。

**解答例「「あ」という文字は、実際の〔あ〕という音と直接結びついて、言葉として機能している。しかし、その文字と音の関係を説明しようとすると、「あ」という文字を使うしかなく、それ以上の場所から説明することはできないから。」（一〇四字）**

その字の読み方を知らない、その語の意味を知らない。ぜったい、読めない字、ぜったい意味わかんない語をマンガで読まされたとき、私たちは、ハハッと笑い、そしてギョッとする。

私たちは、ふつう、「すっぱい」も「あ」も順調に使い、読んでいる。「すっぱい」の示すもの、「あ」の示す音を、経験して知っているからだ。すでに経験しているから、言葉は順調に機能する。しかし、経験したことのない「こむじい」や「〔み〕みたいな新字」をギャグに使われたとき、日常の無自覚な感覚を剥かれるような感じに襲われる。

「すっぱい」はすっぱい事態と、「あ」は〔あ〕の音と、端的に結びつき、その事態やその音を示す。私たちは知っているから、わかる。では、知らなかったら？

――知らなかったら、どうにも、説明できない＝語りえない、というのがここまでの主旨だ。なんだか当たり前のような気がする？　ふだん「すっぱい」を説明する必要もないし、「こむじい」なんてへんてこな語が説明できないのも、そりゃそうだ、ということになるよね。

しかし、語りえないものを語ろうとしてきたのだ、人間は。たとえば「神とは？」とか。神を経験することはできないだろうから（たぶん）、神を示すことはできない。説明できるとしたら、言葉の世界を超越した場所からでないとできない。けど、そんな場所はない。

「すっぱい」が示す事態をそうだと端的に受け取る以上に、説明しようとすることには、どこか無理がある。これは、じつは、〈国語のテスト〉にとっても大問題だ（よね）。小説を読んで、なんか、よくわかる――と思ってたら、テストされてさ、説明せよ、とかいわれる。うーん、この感じはこの表現以外では言い表しようがないのになあ、って思ったことないかな。まさにそのとおりかもしれない。

試験の〈説明〉は、いいかえることによって、そこでいわれようとしていることの焦点をよりくっきりさせようというものだ。個々の語の組み合わせが発生させる〈意味〉は、複雑だから、いろいろな説明＝いいかえも可能だし、それは妥当なことだ。しかし、きわめて端的な――たとえば詩のことばとか、一単語とか、そういうものについては、それはそうだ（こむじいはこむじいだ）としかいえないものもある。

ちなみに、「すっぱい」の語義を、明解国語辞典はこういっている。

●すっぱい【酸っぱい】梅干やレモンを口に含んだときに感じられる味だ。

「そんな味だよね、みなさん、ご存知のとおり」。

⑧　この作品が、前期ウィトゲンシュタインの主著『論理哲学論考』を連想させるとすれば、次の二つの作品は、後期ウィトゲンシュタインの『哲学探究』を連想させる。（本文

のマンガを参照）

⑨　この二作品のおもしろさは同じであるように思えるかもしれない。たしかに、どちらもほんらい意図的にするはずのないことを意図的にするという、共通のおかしさがある。みずから意図して「とりかえしのつかないこと」をする人も、みずから意図して「ウカウカする」人もいないだろう（そういう規則の存在はこういうマンガが描かれることではじめて示される）。

「規則」というのは、ウィトゲンシュタインの用語。言葉の使い方の〈お約束〉。「とりかえしのつかないこと」「ウカウカする」という言葉には、意図するという規則は含まれていない。含まれていないことを私たちは知っていて、これらの語を使っている。――のに、そうじゃない（規則破り）ところで、マンガは笑わせる。

⑩　しかし、「とりかえしのつかないこと」のほうは、もし意図的にしようと思えばできるのだ。「ウカウカすること」はそうではない。これは、しようと思っても自分の力だけでは実現できない。この人は、妻がよその男の人とどこかへ行ってしまった（だけではなくその後しかるべきことが起こった）ときに、はじめて「ウカウカしていた」ことになるのであって、それ以前には、ただ寝ころがっていたにすぎない。意図的にウカウカすることは、いわば不可能なのである。われわれにできることはただ、「ウカウカしていた」と後から描写されるような事態が起こることを期待して、ぼんやりしていることだけである。

⑪　後期ウィトゲンシュタインの哲学はしばしば「言語ゲーム」という概念で説明されるが、ここにあらわれているのは、3「とりかえしのつかないことをする」という言語ゲームと「ウカウカする」という言語ゲームの（こういうマンガが描かれることではじめて示される）差異なのである。

**読解問題3**　「「とりかえしのつかないことをする」という言語ゲームと「ウカウカする」という言語ゲームの（こういうマンガが描かれることではじめて示される）差異なのである」とあるが、それはどのような「差異」なのか、説明しなさい。

筆者が説明しているのだから、それを利用すればいい。ただ、どちらもある意味では同じだけれど、こういう点で差異がある、という形で書くこと。差異だけ書くのではなく。

これは一般的に大事なことだから、覚えておこう。**違いとは、同じ土俵に乗った上での違いであるということ**。「女と男はどう違う？」は、人間なら人間という土俵の上での差異。「宮沢賢治と卓上型扇風機はどう違う？」って聞かれても、ふつうは「？」だよね。これはじつは今、机の上にあるものを書いただけなのだけれど、「宮沢賢治（の写真）は押しピンで留めてあるけれど、卓上型扇風機はただ置いてあるだけ」といえば、「机の上での設置の仕方」という土俵が現れる。

**【解答例】みずから意図して「とりかえしのつかないこと」や「ウカウカする」人などいないということばの規則は共通しているが、「とりかえしのつかないこと」のほうは、もし意図的にしようと思えばできるのに、「ウカウカすること」は自分以外の力によって「ウカウカしていた」事態になるのを待しかないという違い。**

しかし、じつは「うかうか」には、「1気がゆるんで注意が行き届かないさま。うっかり。「うかうかと口車に乗せられる」　2 しっかりした心構えや目的を持たず、ぼんやり時を過ごすさま。「同業者も増えたのでうかうかしていられない」といった意味があり、「ぼんやり」のほうには、「うかうかと日を暮らす＝ぼんやりすごす」という用例もある。この意味の「うかうか」は、「今日はぼんやりすごそう」と意図できなくもないね。

■**読解問題**

1「このような構造」とはどのような「構造」なのか。具体例を挙げつつわかりやすく説明しなさい。

2「それは書きえないのである」とあるが、なぜか。具体例を挙げつつわかりやすく説明しなさい。

3「「とりかえしのつかないことをする」という言語ゲームと「ウカウカする」という言語ゲームの（こういうマンガが描かれることではじめて示される）差異なのである」とあるが、それはどのような「差異」なのか、説明しなさい。

■**発展問題**

三つのマンガを読んで、感じたこと、考えたことを書きなさい。本文の観点が含まれてもいいし、まったく違うものでもいい。

●重要語「言語ゲーム」＝ゲームといってもいいし、「劇」ということもできる。あるお約束のもとで、私たちは言語を使っている。ゲームや劇という言い方には、そのお約束（規則）は、そのつど変わるという意味が含まれている。同じ日本語なのだから、どこで使っても意味は同じだ、というわけにはいかない。

これは、「言語に先立って、個人の内的感覚や客観的事実があらかじめ存在している」と考え、「言語はそれを写し取る道具」とする考えと対立している。

・私たちは言語の世界の外へは出られない。（それ以上説明できないことがある）

・言語のお約束は、場に応じて更新される。

この場はどういう言語ゲームに支配されているのか、と考察することは、実際的な意味でも有効。家と学校と友達では、言語ゲームのルールは違うはず。試してごらん。

■参考　ウィトゲンシュタインの思想についてしっかり知りたいなら、

鬼界彰夫(2003)『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の全軌跡 1912-1951』講談社現代新書　がおすすめ。ノートをとりながら読もう。

吉田戦車『伝染るんです。』全5巻完結セット（小学館文庫）も、おすすめ。いや、もう、爆発的におすすめ。